

地域経済ウォッチング

いわき民報 2009年7月30日(木曜日)

地域社会における小規模企業の役割

「住民のために…」の姿勢

日本政策金融公庫いわき支店長 杉村 樹可

1 昔ながらの雑貨店

いわきの中心地から車で3～40分ほど離れた山あいの集落に、昔ながらの雑貨店がある。年老いた女性1人だけで経営する雑貨店だ。日用品のほか乾物、缶詰など傷みにくい食品も扱っている。付近に他の小売店はない。

この店の経営者は、儲けを増やしたいとか店を大きくしたいなどは一切考えていない。「店が維持できるだけの利益があればよい。とにかく店が存在することで、地域住民の役に立ちたい。」と考えている。だから、店の広さは、開店した50年前と変わらない。改装もほとんど行っていないため、老朽化した木造店舗のままだ。

しかし、この店がなければ、高齢の顧客は徒歩で20分以上かけて最寄の駅前まで買い物に行かなければならない。徒歩20分を超える距離は、高齢者にとって気軽に買い物に行ける距離ではない。また、この店は、地域住民のちょっとした憩いの場にもなっている。この店の常連客は、この店に物を買に来るだけでなく、お茶を飲みながら農作物の作柄や天候や住民の家族の話題などいわゆる世間話を交わすのを楽しみにしている。このことがこの雑貨店の大きな魅力となっている。

2 既存の経営学

このような店は、「非効率だから淘汰されるべきだ。」とされてしまうのだろうか？いや、この店は他に迷惑をかけずに自立した経営を行い、地域の役に立っている。また、他では雇ってくれそうもない年老いた女性に働き場を提供している。しかし、このような店の存在意義は、大企業を念頭に置き、利益の増大を主たる目的として効率性や企業間競争を検討する既存の経営学では説明しにくい。

3 小規模企業の存在意義

いわきの小規模企業の中には地域社会への貢献を第一として、利益の増大を主たる目的としない企業が少なからず存在する。これらの小規模企業は、利益の増大を主たる関心事とした既存の経営学から見ると、その存在意義は重くないと言える。しかし、地域社会への貢献を主たる関心事とする「地域の視点」から見ると、その存在意義には重いものがある。

これらの小規模企業に共通しているのは、地域への愛情や愛着である。その地域が好きだから、まず第一に「地域のために」と考える訳である。したがって、これらの小規模企業は地域に根付いている。顧客に情報交換の場を提供するだけでなく、積極的に地域行事に参加し、地域の中で、行政や学校や他企業などと結びついている。これらの小規模企業は、自らが「地域の視点」に立って行動している。

4 現在の経済社会と企業活動

現在の経済社会を見ると、企業があまりに利益の追求に走りすぎ、そのひずみが拡大しているのではないかと思うことがある。今回の世界金融危機や原油、原材料価格の乱高下などがその典型だ。個々の企業がそれぞれ別々に利潤を最大化することが必ずしも全体の利益とはならないことがはっきりしたのではないだろうか。

現代は、企業中心の社会となっている。この企業中心の社会の中で、我々は、何でも企業の利益を増大することと結びつけて考えてきたように思われる。しかし、今、我々は、このような既存の経営学ではなく、「地域の視点」に基づき行動する地域の小規模企業を改めて見直し、利益重視でない企業活動のあり方を探る時期にあるのではないだろうか。

※東日本国際大学と日本政策金融公庫いわき支店は産学連携の協力推進にかかる覚書を締結しています。今回連携事業の一環として杉村いわき支店長には、いわきヒューマンカレッジ「地域経済学部(会場:東日本国際大学)」において「小規模企業の存続と地域社会での役割」について講義を行っていただきます。